

ベアトゥスの黙示録註解書写本について

中世初期のイベリア半島北部アストゥリアス地方のリエバナにある修道院の修道士、ベアトゥス(ベアトBeato ? -798)が776年に「ヨハネの黙示録註解書」を編纂しました。原本は既に存在していませんが、非常に人気を博し、10世紀から12世紀にかけて多くの写本がイベリア半島はもとよりフランスやイタリアなどで制作されました。ほとんどの写本には、彩色された挿絵が多数描かれており、その鮮やかな色使いと想像力豊かなインパクトの強い挿絵が後世にながく影響を与えてきました。

これまでに発見されたベアトゥス写本のうち、挿絵入りのものは29 写本あり、そのうち完本の写本は22写本、断簡の写本が7写本あります。

本ライブラリーには完本22写本のうち20写本のファクシミリ版があります。ファクシミリ版の中には羊皮紙の厚みやシワ・汚れ・破れ・落書きなどをそのまま再現した精巧なものもあります。

今月の展示写本

- (1) ベアトゥス黙示録写本 (①②③④)
- (2) その他写本(⑤⑥)

①【ベアトゥス黙示録註解書：マドリッド写本】

10世紀前半に制作された最初期のベアトゥス写本。挿絵が切り取られている箇所が多く、当初60点以上あったと考えられる挿絵が29点の絵図しか残っていない。

②【ベアトゥス黙示録註解書：

エスコリアル写本】

エスコリアル写本の挿絵は、モーガン写本やジローナ写本と違い、青や赤はあまり使用されず、代わりに黄色や泥がかかった茶色・ダークグリーンに塗られ、それはのちのコゴーリャ写本にも受け継がれます。特に人物の顔の描き方に特徴があり、鼻と片方の眉がほぼ直角の直線で描かれ、大きなしずく型の目が特徴です。

③【ベアトゥス黙示録註解書：シロス写本】

サントドミンゴ デシロス修道院で制作された本写本は、修道士ムーニョとドミニコが写字を、ペトロスが挿絵を行ったことが書かれています。挿絵をすべて書き終えたのは、写字が終わってから18年後の1109年でした。

写本はほとんど完全な状態にあることから、あまり使用されていなかったと考えられます。

④【ベアトゥス黙示録註解書：ベルリン写本】

イベリア半島以外で制作された数少ない写本の一つで、12世紀のイタリア中部で制作されたと思われます。中品質の羊皮紙(300 X 190mmと小さめ)98葉に書かれています。

55点の挿絵は他のベアトゥス写本とは違い、細いペン画が主体で、ところどころ薄い黄色や茶色・赤色で彩色されています。

⑤【トリーア黙示録写本】

9世紀初頭(第1四半期)にフランスあるいはドイツで制作されたカロリングスタイルの黙示録写本。トリーア写本と共に、黙示録の完全なテキストと挿絵を伴う残存する最初期の彩色写本。

挿絵はトリーア写本同様の太い縁取りでおおわれていますが、単色は少なく、いくつかのブロックで色分けされています。ただし、最初の2つの挿絵のみ網目のような模様が入っています。

⑥【トリニティ黙示録】

13世紀半ばに英仏で流行した黙示録の中でも特異な位置にある黙示録。

当時の写本としては大判(435×320)の写本で、豪華絢爛に彩色されていることから、高貴な身分の人に献呈されたと考えられる。